作業療法教育における

ＯＳＣＥの取り組み

伊藤文香[1)]・鈴木孝治[1)]・学科教員[1)]

1)茨城県立医療大学保健医療学部
作業療法学科

Ⅰ．はじめに

昨今、医療技術系教育機関において議論されている総合的な臨床技能については、その評価の困難さから、ＯＳＣＥ（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）を導入する機関が目立ってきているが、本学では、平成 16 年度より大学全体で総合的な臨床技能の教授・評価に関して取り組んでいる。

本学作業療法学科におけるＯＳＣＥの基本理念は、学生が教育を通して習得した作業療法介入時の技術と知識に関する Minimal Essentials を、臨床実習前に確認し、臨床実習後に再確認することにより、卒業時の作業療法学の臨床レベルを保証することである。

第１回ＯＳＣＥは、３年生の臨床実習Ⅱの「まとめ」と４年生の総合臨床実習の「準備」を兼ねた「対象者の評価」に焦点を当て、評価技能の習得度の確認を目的とした。実施時期は、３年前期に開講される臨床実習Ⅰ（週１回一日学外における臨床実習を連続７回）を経験した学生が、作業療法学領域全般の評価学と治療学を習得した３年後期の定期試験終了後の春季休暇中に実施される臨床実習Ⅱ（連続 10 日間の学外臨床実習）と４年前期前半の総合臨床実習（連続８週間の学外における臨床実習）の間に実施した。

Ⅱ．ＯＳＣＥの概要

今年度は、作業療法学の主たる領域である身体障害領域および精神障害領域を中心に、人体模型および面接ビデオを教育教材として活用し、ボディメカニクスおよび対人交流の「評価」に焦点をあてて教授した（図１）。

その教育効果を確認する意味も含め、第１回のＯＳＣＥは、作業療法学科全教員の取り組みにより、作業療法学科３年次生 40 名を対象として行った。内容は、①バイタルサイン、②感覚機能検査、③関節可動域検査、④片麻痺回復段階評価、⑤基本動作介助、⑥更衣指導、⑦記銘力検査、⑧面接、の８ステーション設定（図２）で、８課題、70 評価項目（内５項目は、模擬患者の評価項目）で構成された。被験者はすべて模擬患者を用い、片麻痺回復段階評価・更衣指導・面接の３課題では、作業療法学科教員が患者役を演じ、他の課題はすべて作業療法学科１，２年生の協力を得て行った。

評価方法は、すべての課題で、学科教員が「できる」、「できない」の２段階判定を行い、面接の場合はこれに模擬患者からの「できる」、「できない」の２段階判定が加わった。合否判定は、全課題の合計得点を 100 点とし、各課題で 60％以上かつ総合得点で 60 点以上を合格とし、不合格者は総合臨床実習開始前までに復習を徹底させると同時に担当教員による指導を実施した。

なお、実施直後に五肢択一式で 32 項目からなるＯＳＣＥアンケートを実施した。

Ⅲ．結果

１．総得点からみた特徴

40 名の総得点の平均および標準偏差は、80.43±7.56 で、その範囲は 63 から 94 であった。総得点での不合格者はみられず、全体として高得点側の分布であった。

２．課題ごとの特徴

８課題すべてに 60％以上であった者は 40 名中 28 名で、7 割の合格率となっ

た。残り 12 名は１ないし２課題で不合格となっていた。全員が合格した課題は、バイタルサインと記銘力検査の２課題で、ボディメカニクスとは直接関係しない課題であった。他の６課題では、延 16 名の不合格者となっており、その割合の多い順に、基本動作介助（12.5%）、感覚機能検査および面接(7.5%)、関節可動域検査および片麻痺回復段階評価（５%）、更衣指導(2.5%)、となっていた。これらは、ボディメカニクスおよび面接に関与する課題であった。

３．アンケート結果との比較

アンケートでは、ＯＳＣＥの意味･意義、学生自身の今後の課題の理解は、ほぼ達成されたようであるが、十分には実力を発揮できなかったという指摘が目立った。

各課題との関係では、バイタルサイン、感覚機能検査、面接の３課題で、過去の授業で十分には扱っていないという指摘があった。また、難しいと感じた課題は、感覚機能検査、面接、更衣指導、片麻痺回復段階評価、基本動作介助の順で、これは不合格の割合とほぼ一致していた。

Ⅳ．結論

今回の評価を中心としたＯＳＣＥでは、総得点でみると全員が合格し、個々の課題を検討すると３割の学生が弱点を指摘され、総合臨床実習までに行うべき準備が明確となり、実力を発揮するためにはさらなる準備の必要性が意識されたといえる。

また、指摘された６課題を検討すると、ほぼ 1 割の学生が十分には理解できなかっただけで、残りの９割の学生は十分に理解を深めたといえる。人体模型および面接の解説ビデオを利用したボディメカニクスおよび対人交流の「評価」に焦点をあてた教授が、効を奏したと推察される。

Ⅴ．今後の課題

第２回ＯＳＣＥは、本学４年間の知識と技術の Minimal Essentials を確認する目的でAdvanced　ＯＳＣＥを実施する(2005 年９月 16 日施行)。４年生の総合臨床実習（連続８週間の学外における臨床実習を２施設）を終了した後、夏季休暇後の後期授業が始まる直前に作業療法技術と知識の総まとめとし「介入ならびに臨床における応用」に焦点を当て、卒後の臨床に応用される課題設定として実施する。

今後、質の向上のため、第２回ＯＳＣＥの結果と総合臨床実習での成績との関連を検討し、ＯＳＣＥの内容的妥当性の確認をすることが課題である。

図１　人体模型を用いて骨の位置を確認している様子

図２　ＯＳＣＥ時の面接ブースの様子